第 60 回（一社）比較統合医療学会学術大会
第 20 回日本補完代替医療学会学術集会
一般講演 20

手作り食で QOL が向上した犬の肝リンパ腫の一例

A case of improved QOL of Canine hepatic lymphoma following homemade diet

山口真紀子 [1)]、荒木幸子 [2)]、川角　浩 [3)]
Makiko YAMAGUCHI[1)], Yukiko ARAI[2)], Koh KAWASUMI[3)]
1）るい動物病院　2）ヤマザキ学園大学　3）日本獣医生命科学大学
1）Rui Animal Hospital　2）Yamazaki Gakuen University
3）Nippon Veterinary and Life Science University

はじめに

現在、犬や猫の食事はドライフードや缶詰といった、総合栄養食と呼ばれるフードを与えるのが一般的となっている。

しかし、加熱・加圧といった生成過程における食材へのダメージや栄養素の失活の可能性、開封後の油脂の酸化、保存料や添加物の問題などを懸念し、手作り食に興味を持つ飼い主も増えてきている。

今回、手作り食に変更したことで QOL が向上したと思われる担癌犬の 1 症例を報告する。

症例

バーニーズマウンテンドッグ　避妊メス　11 歳

突然の食欲不振により他院を受診、エコーおよび生検による病理診断により High grade の肝リンパ腫と診断される。抗がん剤の投与は望まれず、QOL の向上を目的として当院を受診された。

それまでは 100% ドライフード食であった。

治療

プレドニゾロン 20mg/D 経口投与
オゾン注腸法（週 2 回～週 1 回）
イムノプロ（上薬研究所）投与

オーソモレキュラー療法の考え方に基づき抗炎症・抗酸化対策として、DHA、ビタミ B 群、ビタミン D、ビタミン E、ヘム鉄の投与、肝機能保護のためミルクシスルの投与を行い、合わせて低炭水化物・高タンパク質を中心とした完全手作り食に変更した。

結果および考察

オゾン療法の効果か治療当日の晩より食欲が回復したため、手作り食の完全移行は容易であった。

その後も食欲旺盛で元気も良く、治療開始より 30 病日までは健康時と何ら変わらない生活を送っていた。

血液検査上でも肝酵素の数値は順調に回復し、CRP も低値を保っていたが、33 病日より急激な肝酵素の上昇･黄疸の症状を呈し、35 病日に死亡した。しかし担癌宿主において末期状態でしばしばみられるアルブミンの低下や貧血もなく、体内の脂質の酸化の指標となる MDA も経過と共に低下しており、担癌犬において、手作り食を基本とした栄養管理をすることにより、癌の完治にはいたらなくとも、最後まで QOL の向上を図ることができる可能性が示唆された。